

メインストーリー概要

■タイトル 「大発見は足もとに」 作者：阿部夏丸

■主な登場人物

ヒロキ …一般的な小学6年生男子（主人公）

ユウヤ …ヒロキのクラスメイト。6年の4月から不登校。生きものに詳しい。

ヒロキの父 …かつての川ガキ

ヒロキの母 …一般的な母親

ユウヤの母 …雑誌のライター

■あらすじ

1. おばけ池の少年

舞台は新興住宅地の「みどりが丘団地」にある「おばけ池」。そのおばけ池に、夜な夜なおばけが出るとのうわさが学校に広まっていた。実はヒロキは、おばけの正体にうすうす気づいていた。

ある夜、ヒロキはこっそり家を抜け出しおばけ池にむかうと、おばけの正体は思った通り、4月から不登校で幼なじみのユウヤだった。

おばけ池は生きものの宝庫だった。ユウヤは夜な夜な生きものを見に来ていた。ヒロキはユウヤとおばけ池で、柳の樹液に群れるたくさんの夜の虫をみつけた。そして懐中電灯で池の水面を照らすと、そこには父が絶滅危惧種だと言ったメダカが何匹もいた。その夜、二人がおばけ池で再開したこと、ここにたくさん生きものがあることは、二人だけの秘密になった。ユウヤが、明日はアミを持って来ようとヒロキを誘った。

2. 君はどうしたい

翌日学校で、昔このあたりが山と畑ばかりだったこと、おばけ池がもともとは農業用のため池だったことを知る。その夜、二人はアミを持って池に出かけ、ヤゴやザリガニ、メダカやフナ、モツゴ、ヨシノボリ・・・たくさんの魚を捕まえて、ヒロキは大いに感動した。そして、この池が昔からある石組みの池をコンクリートで覆っただけなので、昔から棲んでいる魚たちが今もいること、池の西側に排水トンネルがあること、北側からは池に水が染み出していることを知った。ヒロキは池の中で腕ほどの太さのある黒くて長いへびのような影を発見し、驚いて浅瀬でしりもちをついてしまった。

ずぶぬれになったヒロキはそのままでは家に帰れず、どうすべきか迷っていた。とりあえずユウヤの家に向かったヒロキは、に、「君はどうしたい」とユウヤの母に尋ねられ、その夜はユウヤの家に泊まることにした。ヒロキは、なんでも命令口調の自分の母親とはずいぶん違うと感じた。

ユウヤはさっきヒロキが見た大きな魚が、ウナギであることを魚類図鑑で突き止める。そしてウナギが遠いマリアナ海溝で生まれ、川を上って池まで来たことを知り、おばけ池が本当に海につながっているのかどうかと疑問を持った。海で生まれて川を上ってきた、100センチを超える大ウナギ。二人はもうすぐ始まる夏休みに、ウナギを捕まえることを決意した。

3. トンネルを抜けたら

二人はまず、おばけ池のトンネル探検に出かけることにした。初めて見るコウモリに

驚きながらもトンネルの出口に達すると、流れ出た水が滝つぼをつくり、そこにはたくさんの魚が棲んでいた。そのうちそこが神社の森の奥であることや、流れ出た川の上流側がコンクリートブロックの壁で断ち切られていて、その上に道路が通っていることに気付いた。かつておぼけ池の水は団地の丘を回る一里川の流れとなっていたが、今では道路工事で埋められてしまった。その代わりにトンネルが掘られた。そしておぼけ池の水が、トンネルを通して、海までつながる仁の川に注いでいることに気付いた。おぼけ池は海とつながっていた。ウナギがいても不思議ではない。

4. 一匹では生きられない

大ウナギをどうやって釣るか、意外なるアドバイザーはヒロキの父だった。父から教わった仕掛けを手に、ヒロキとユウヤは捕獲作戦を開始する。ウナギが潜んでいそうな場所が、水が湧く北側の石垣の奥であることも教わった。が、本当に大ウナギはいるのか。

雨の日、ふたりはウナギの餌となるドバミミズを捕まえようと、傘をさして公園に向かった。ミミズはたくさんとれた。公園でユウヤは、二匹のカタツムリが絡み合っているのを見つけた。ヒロキはそれを共喰いだと思ったが実はそうではなく、カタツムリの交尾であること、一匹のカタツムリがオスとメスの機能を両方持っているが、一匹では繁殖できないことをユウヤから聞いた。なぜか一匹では生き残れないことを知り、納得はできないが面白いと思った。

雨は上がり、ふたりはウナギ捕りを今夜決行することにして別れた。

5. 大ウナギを釣るのだ

夕食後、ふたりは釣り針をポケットに忍ばせ、釣れたら飼うのか食べるのか、想像をふくらませながらおぼけ池に向かった。どっちが先にウナギを釣るか。ユウヤは初めてミミズを釣り針に刺した。北側の斜面の両側に二手にわかれて、北側の中央に向かって進んだ。石垣が崩れてできた大きな穴を見つけ、そこに釣り針とタコ糸と竹の棒で作ったしかけを穴に差し込んだ。しばらく待つと「ゴン、ゴゴン」とあたりが来た。これはウナギに間違いない。大格闘の末、二人はウナギを捕まえることに成功。用意してきた衣装ケースにウナギをなんとか押し込んだ。大きさは85センチと1メートルには足らなかったが、十分な迫力だった。ふたりはウナギを釣った感動と、釣ってしまった後の脱力感に浸っていた。つかまえたウナギをもう一度よく見ようと、衣装ケースのふたを開けたら、、、ウナギはまんまと逃げてしまった。

がっくりと肩を落とすヒロキとユウヤだが、この一か月おぼけ池に通ったこと、トンネルを探検したこと、気持ちの悪いミミズをハりに刺したこと、池にとびこんだことのすべてを、とても楽しいことだと思った。

逃げたウナギがどこに行ったのかはわからないが、水路を下ったのであれば海に行けるということだと、気持ちを納得させようとする。ウナギはまた釣ればいい、このおぼけ池は海につながっているのだと。

ヒロキは、夏休みが終わったら学校に来ないかとユウヤを誘った。学校に来ればもっと遊べるからとヒロキは言うが、ユウヤは学校には行ってないが、ずっと遊んでいるし、これからも遊ぶと答えた。

ヒロキは、学校に行くかどうかはユウヤ自身が決めることなんだと、納得した。

その後学校では、おぼけ池のおぼけが二人に増えたと、うわさが広がった。おぼけがもっと増えれば良いと、ヒロキは思った。